

母語運用能力というのは、平たく言えば、一つの語を（場合によっては一つの音韻を）口にするたびに、それに続くことのできる語の膨大なリストが出現し、その中の最適の一つを選んだ瞬間に、それに続くべき語の膨大なリストが出現する……というプロセスにおける「リストの良さ」と「分岐点の数の多さ」のことである。「梅の香りが……」という主語の次のリストに「する」という動詞しか書かれていない話者と、「薫ずる」、「聞こえる」という動詞を含んだリストが続く話者では、そのあとに展開する文脈の多様性に明らかな差が出る。

このような「どんくさい」ツールは複文以上の論理階層をもつ文章を書くことには適さないと私は思う。ということは、携帯メールを主要なコミュニケーションツールとする人々はいずれ「複文以上の論理階層をもつ文章を書くことができない」人間になる可能性があるということである。というか、実際にそうなりつつあるらしい。

===Web===

ふく - ぶん【複文】

文を構造上から分類した場合の一。主語と述語からなる文でさらにその構成部分に主語・述語の関係が認められるもの。「ここは雨の多い地方だ」など

=====

これは私が何年か物書き仕事をしてきて学んだことであるが、**物書きは本質的には「ニッチ・ビジネス」である**。つまり、「私の代弁者がどこにもいない」という不充足感に苦しむ読者たちをクライアントに標足する、ということである。

私がものを書き始めたのは「読みたい雑誌がない」ということが大きな理由であった。仕方がないので、自分で書いたエッセイを自分に読ませていたのである。

よく、「どうしてあんなにたくさん本を書くんですか？」と訊かれるが、むしろ**自分で読むため**である。

というのは、私の書いたものは私の気分を代弁してくれる確率がそれ以外の文章の場合よりもたいへんに高いからである。

学術論文のスタイルには「アングロサクソン型」と「大陸型」の二種類がある。社会科学系の論文は（理科系の論文に準じて）アングロサクソン型で書かれるのがふつうであるが、宗教や哲学や文学などについて論じる場合は必ずしもそうではない。というのは、論文の主題がしばしば「論文を書きつつある主体自身の思考の手続きや文体そのものが歴史的条件や個人的なバイアスによって

規定されており、論文を書きつつある主体がみずからのこの被投性をひとうせい そきゆうてき遡及的に問う」という面倒な作業を伴うからである。つまり、「今この文章を書きつつあるこの『私』なるものにはどれほどの

信頼性があるのだろうか。『私』は今この文章を書いているという夢を見ているだけなのかもしれないし、実は気が狂っていて、この文章を害いているという妄想を抱いているのかもしれないし、実はもう死んでいて、それに気づかずにいるのかもしれない……」というようなことを一応可能性としては「ある」ということにしておいて、その上で書くというのが「大陸型」の骨法なのである。フーコーやデリダやレグィナスやラカンのような書き手がその代表である。

ということをご説明する。「大陸型」の書き手は「アングロサクソン型」の書き物をすらすら読めるが（だってわかりやすいんだもん）、「アングロサクソン型」の書き手は「大陸型」の書き物を理解しようとする努力を惜しむ傾向にある（自分が狂っている可能性さえ勘定に入れて書いているわけであるから、「わかりやすい」はずがない）。この非対称性ゆえに、**大陸型の書き手とアングロサクソン型の書き手はお互いを「バカ」だと思っている**。不幸なことだが、そうなのである。

私たちの社会では、「エビデンス」のないものは「存在しない」ことになっている。私は先ほど「アラーム」と書いたが、もちろんそのようなものに「エビデンス」はない。だから、常識的に考えると、「アラーム」というのは私の「妄想」だということになる。だが、そのような種類の危険に対するセンサーが現に作動していなければ、武道の稽古が成り立たないということは経験的にはたしかである。

私が「アラーム」と呼んでいるものは「エビデンスが存在しない」のではなく、「エビデンスを考量できる計測機器がまだ存在しない」ものだと考えたい。一九世紀末に、ディミトリ・イワノフスキーが陶板の細菌濾過器を通過しても感染力を失わない病原体を発見して、「ウィルス」仮説を立てたときに、「ウィルス」はまだいかなる計測機器によっても視認できなかった。**「存在するのかもしれないのか」という事実問題と「計測機器による実測が可能かどうか」という技術問題の間には本質的な関係はない**。だから、「計測できないものは存在しない」と推論することは論理的には間違っている。

その場合には、地震や津波のあとも、原発では

何も起きなかつただろう。何も起こらなかつたのだから、その人の功績には誰も気づかない

（本人さえも）。けれども、私たちの社会はそのような **unsung hero** 「その功績を歌う人のいない英雄」たちの**無言の献身**によってかろうじて今あるようなものとして成り立っている。そのことを忘れるべきではないと私は思う。

けれども、それをいったい誰に向かって告げればいいのか。それがわからない。

私は論争ということをしない。

自分に対する批判には一切反論しないことにしているから、論争にならないのである。

どうして反論しないかという、私に対する批判はつねに「正しい」か「間違っている」かいずれかだからである。

批判が「正しい」ならむしろ私には反論できないし、すべきでもない。

私が無知であるとか、態度が悪いとか、非人情であるとかいうご批判はすべて事実であるので、

私に反論の余地はない。肅々とご叱^{しっせい}正の前に頭を垂れるばかりである。

また、批判が「間違っている」なら、この場合はさらに反論を要さない。

私のような「わかりやすい」論を立てている人間の書き物への批判が誤っている場合、それはその人の知性がかなり不調だということの証左である。そのような不具合な知性を相手にして人の道、ことの理を説いて聴かせるのは純粋な消耗である。

というわけで私はどなたからどのような批判を寄せられても反論しないことを覚^{とうぜ}是としている。

ネット上で無料で読もうと、買って読もうと、どなたも「私の読者」である。本は買ったが、そのまま書架に投じて読まずにいる人は「私の本の購入者」ではあるが、「私の読者」ではない。私は「私の読者」に用があるのであって、「私の本の購入者」に用があるわけではない。

著作権についての議論ではどうもそこどころが混乱しているような気がする。

もの書く人間は「購入者」に用があるのか、「読者」に用があるのか。

私は「読者」に用がある。

「この本をぜひ私有して書架に置きたい」と思わせることができるかどうか、物書きの力量はそこで試される。

誰でもブログに書くことができるようになったので、物書きの質が変わったかどうかについて。「誰でも書き手として全世界に個人的メッセージを発信できることになり、参入条件が劇的に緩和されたわけですがけれど、それによって従来の出版文化からは排除されていたタイプの書き手や文体が登場してきたということはあまりなかったと思います。真にイノヴェーティヴな書き手は『参入障壁が低くなったから書き始める』というようなことほふつうないからです。ほんとうに書きたい人は『書くな』と言われても書きます。」

プロの書き手とアマチュアの書き手の壁はもはや「単行本化」されるかどうかしかなかった観があるけれど、書物という媒体そのものもいずれ消滅するのか。

『プロの書き手』と『アマチュアの書き手』の違いというのは客観的基準があるわけではありません。本人が『俺はプロだ』と言えば、それでプロです。

僕は自分のことを『アマチュアの書き手』だと思っていますが、それは別に単行本の有無とは関係ありません。『著作物で生計を立てている』ということでもありません。

だって、あらゆる出版社から『あなたの本はもう出しません』と言われたらそのときは『あ、そうですか。じゃ、自分で出すからいいです』って言うはずですから。

傍は言いたいことがあるので書いているわけで、『止めろ』と言われても書きたいことほ書く。『お金をくれる』から書く、くれないなら書かないというような基準で書いているわけではありません。

中国の危隣は「著作権」についての施策において予兆的に示されている。

ご存じのようにかの国においては他国民の著作物の「海賊版」が市場に流通しており、コピーライต์に対する遵法意識はきわめて低い。それによって、現在のところ中国国民は廉価で、クオリティの高い作品を享受できている。

国際的な協定を守らないことによって、短期的には中国は利益を得ている。

けれども、この協定違反による短期的な利益確保は、長期的には思いがけない国家的損失をもたらすことになると思う。

それは「オリジネーターに対する敬意は不要」という考え方が中国国民に根付いてしまったことである。

誰が創造したものであろうと、それを享受する側はオリジネーターに対して感謝する必要も対価を支払う必要もない。黙って、コピーしてそれを売って金儲けするのは「こっち」の自由だ。国民の多くがそういう考え方をする社会では「オリジナルなアイディア」をもつことそれ自体の動機づけが損なわれる。論理的には当然のことである。

「新しいもの」を人に先んじて発明発見した場合でも、それはエピソード^{ひょうせつ}や剽窃者によってたちまちむさぼり食われ、何の報奨も与えられない。それが「ふつう」だという社会においては、「オリジナルなアイディア」を生み出し、育てようという「意欲」そのものが枯死する。

みんなが「誰かのオリジナル」の出現を待つだけで、身銭を切って「オリジナル」を創り出すことを怠るような社会は、いずれ「そこにゆかなければ『ほんもの』に出会えないもの」が何もない社会になる。

「オリジネーターに対する敬意」をもたない社会では、学術的にも芸術的にも、その語の厳密な意味における「イノベーション」は起こらない。

私たちが死ぬのを嫌がるのは、生きることが楽しいからではない。一度死ぬと、もう死ねないからである。

すべての人間的価値を本質的なところで構成するのは「死」である。「可死性」というものがあらゆる人間的価値の中心にある。

品格というものは本質的に外部評価である。「私は品格が高い」と本人が大声で呼ばわっても仕方がない（というか、そういうのはふつう「夜郎自大」と言って、「とても品がない」人間に典型的なみぶりである）。「あの人、品がいいね」というのはよそさまに言っていただくものである。

===Web===

夜郎自大

[名・形動]《『史記』西南夷伝にみえる話で、昔、夜郎が漢の強大さを知らずに自分の勢力を誇ったところから》自分の力量を知らずにいばること。また、そのさま。夜郎大。

=====

出版関係者と話をしていると、みんな一様に「文学作品が売れなくなった」と言う。ベストセラーリストを見ても、ダイエツト本や「〇〇ができるようになるための一〇〇の方法」といった本ばかりである。

実際に今、私の目の前には谷崎潤一郎賞という文学賞を主催する「中央公論」の編集者が座っているのだけれど、その彼からも悲しげな「文学は必要なんですか？」という問いを向けられた。さて、どうなんですか。文学って、必要なんだろうか。この問いを奇貨として「文学」について、いささかの私見を述べてみたい。

いくつか例外はあるが、全体として文学作品は売れていない。なぜか。

身も蓋もない言い方をすれば、それは提供されている**作品のクオリティが低い**からである。悪いけど。

出版不況にしても、新聞の購読者数の激減にしても、送り手側は「私たちはこれまでと変わらず質のよいものを作っている。だが、売れない。これは**読者の質が落ちた**からである」というロジックを使って責任を転嫁しようとする。でも、それは違うと思う。

「文学界」や「新潮」や「群像」など月刊文芸誌の発行部数は三〇〇〇部から五〇〇〇部である。読者のほとんどは作家か批評家か編集者か、作家・批評家・編集者になりたい人たちである。家に送られてくるこれらの文芸誌をばらばらとめくるとき私が感じるのは「**酸欠**」感である。どうしてこんなに「**狭い**」ところにあなたがたは入り込んでいるのか？ それが不思議になるのである。

たしかに、この「狭苦しさ」そのものが日本社会の現況であり、それゆえ「狭苦しいところ」にひしめいて「狭く苦しい」話をするとところに、ある種のリアリティが際立つということはあるのかもしれない。この不毛さそのものが今の日本文化の本質的不毛さと同期していると言うことも可能かもしれない。でも、どうして「そんなこと」をしたがるのか、私にはやはりわからない。

時代小説がとりわけ選好される理由が、私はわかる気がする。どれほど現代人のような人物造形をしても、社会システムが違う以上、その立ち居ふるまいや理非の決断について「現代人のまま」を適用することができないからである。その物語世界では、私たちにとって異邦的な制度（主従関係や士道倫理）がリアルであり、私たちがもう忘れたもの（夜の底なしの闇や足をとらえる泥濘^{ぬかるみ}）が切迫するところを書かなければならない。読者たちは、そこで現実とは違う世界にしばらくの間身を浸すことができる。そこからつかの間の解放感を得ているのではないか。私はそんなふうに見える。

そして、時代小説（に限らず中間小説や大衆小説）が純文学をしりめに隆盛を極めているのは、そこに批評家がないからである。「この小説が面白い」と言って、「ぜひ読みなさい」と必死に勧める書評家はいるが、「こんなものは小説ではないから読むべきではない」と言って腐すような人間はいない。なぜこの小説はこんなにつまらないのかというような分析に知的資源を投じる批評家はこの領域にはいない。

そういう連中がいるのは純文学だけである。そして、彼らが純文学をここまで萎縮させてしまっ

ただと私は思っている。